

## ヴォルガ旅行記—ロシア極東との比較

左近幸村（2009年10月10日）

私自身は、ロシア極東と呼ばれる地域の歴史を、19世紀後半から第一次世界大戦期まで、アジアとの関係を視野に入れながら研究している。そんな私が、今まで縁がなかったヴォルガ流域への旅に同行することになった。というのも、ロシア極東の専門家と言っても、ロシア帝国全体を視野に入れていなければ、ロシア史の専門家とはもちろんのこと、実は東洋史や日本史の人たちとも対話がままならないということを、最近実感することが多いからである。そこで、自分一人では行きそうにない地域への旅に、同行させてもらうことにした。

まず、ウラジーミル、ニジニ・ノヴゴロド、カザンの街並みについての感想を記せば、それほど新鮮な驚きというはなかった。というのも、現在、ロシアで最もヨーロッパ的な街と言われるペテルブルグに住んでおり、8月にはヘルシンキという正真正銘の「ヨーロッパ」を旅行してきたこともあり、モスクワ以東の「ロシア的光景」に驚きを覚えるかと、ちょっと期待(?)していたのである。なぜ驚きがなかったかと考えてみれば、私がこれまで訪れた極東の諸都市、ウラジオストク、ハバロフスク、ブラゴヴェシチェンスクで見えてきた光景と、実は割とよく似ているからだと思われる。古いヨーロッパ風の建築とソ連時代の名残のビルと最新式の建物が混合する街並み、薄汚れた車が多く走る道路等々の光景は、ロシア全土で共通しているのかもしれない。もちろん共通していると言っても、一定程度の違いはある。ただ私にしてみれば、8月に行ったヘルシンキの印象が強烈だったので、それと比べればロシア国内の諸都市の共通性のほうが目につくということである。

カザンでは地下鉄にも乗ったが、さすがにプラットホーム、車両ともオンボロとは言えないものの、日本のようにいかにも「ピカピカした最新式!」という雰囲気は漂わせていなかったのは、象徴的だった。個人的には、モスクワの地下鉄の4番線（フィリョーフスカヤ線）の車両のほうが、綺麗だった印象がある。カザンの地下鉄はプラットホームが暗めなので、よけいそのような印象になったのかもしれない。

さて実際に旅行してみると、単に地理的に新しい体験だったのみならず、もう一つ、今まで自分の研究とは縁のなかったものに出会うことになった。今回は基本的に、文化や宗教の研究を行っている人たちによる旅行であり、各地の教会を中心に見てまわった。ところが私の専門は経済史であり、これまで文化、特に宗教の問題には関心を払ってこなかった。私が扱っている時期のロシア極東においては、旧教徒の入植という点を除けば、宗教の問題がそれほど前面に出てこなかったという事情もある。一週間、これだけ集中的に宗教施設を訪れたのは生まれて初めてのことであった。ただ幸か不幸か、その結果敬虔な気持ちになれたかという、むしろ逆で、最後のほうはイコンを見るのに疲れてしまったというのが、正直な感想である。しかも私の場合、旅行の後しばらくモスクワで間借りさせてもらった家がまた正教信者で、私に貸された部屋がイコンだらけだった。そのことで、よ

けい面喰ってしまったというのものもある。神は私にとって、まだまだ遠い存在らしい。

ただこうやって集中的に正教に接してみると、ロシア極東についても今まで気がつかなかった発見があった。昨年ブラゴヴェシチェンスクを訪れた際、最近になって再建されたという街の中心の教会を、外観だけであるが見学したし、2006年に街の創立150周年を記念して出版された市史の中でも、経済のみならず、極東における宗教の中心地としてのブラゴヴェシチェンスクの歴史が、強調されている。そもそもブラゴヴェシチェンスクという街の名前自体が、正教にちなんでいる。昨年極東を訪れた際は深く考えなかったものの、こうしてヴォルガ流域の教会を見てまわり、一緒に旅をした専門家の人たちが、ロシア正教の復興とナショナリズムの高まりを認識しているのを踏まえて考えると、ロシア極東にも、正教の波は確実に及んでいると見るべきなのかもしれない。ウラジオストクについては、寡聞にして正教の話は聞いていないが、今度訪れた際、そちらのほうにも関心を持って街を観察してみたいと思う。